

木曾川文庫

木曾川

INDEX.....

ふるさとの街・探訪記《本巢郡根尾村》

越前と美濃を結ぶ要所として歴史を重ねた、根尾村

AREA REPORT

一瞬にして牙をむく災害、その被害の実情

気ままにJOURNEY

小雪の舞い降りる山国に、文化の源流をみる。

歴史ドキュメント

国内最大規模の川幅を誇る
起渡船場と美濃路

TALK&TALK

起渡船場の船と人

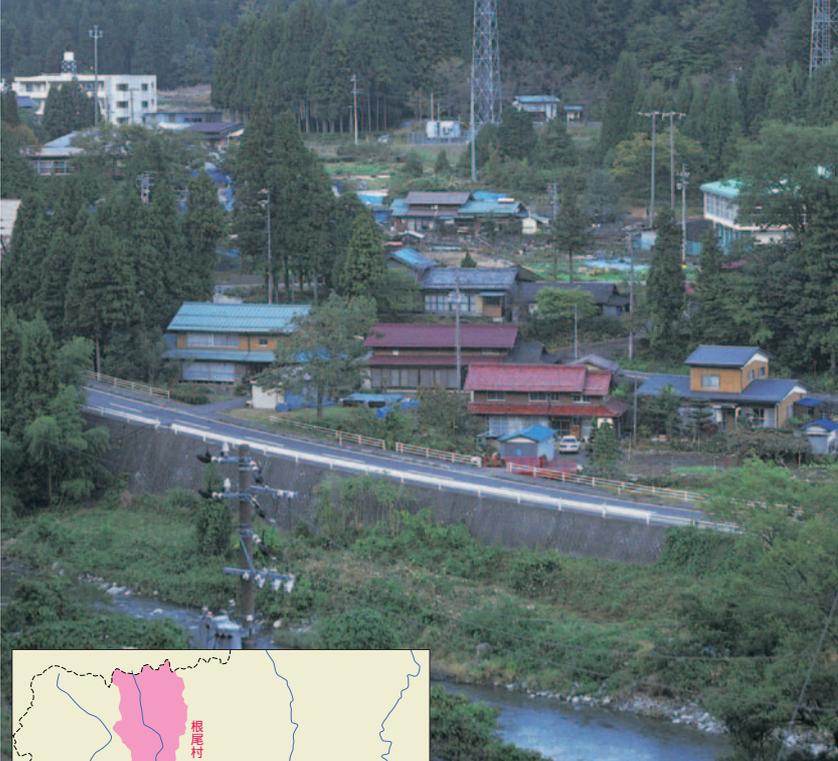
民話の小箱

しゅうずと章駄天走りの大男



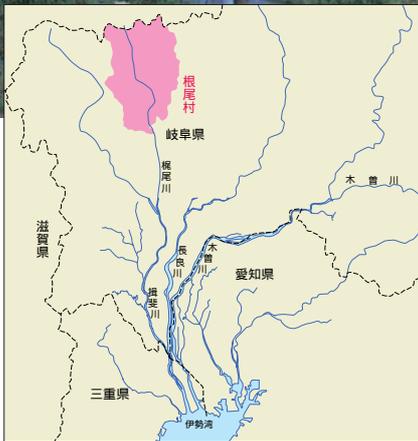
木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに
考えていきたいと思っています。
冬号は根尾川源流の根尾村から
その歴史や災害レポートを、
「川と街道」シリーズでは美濃路と起宿を特集します。





根尾川と根尾役場周辺

越前と美濃を結ぶ要所として 歴史を重ねた根尾村



能郷白山を主峰に連なる越美山脈。これを源流に揖斐川に合流する根尾川。美しい自然美が織りなす根尾村は、山紫水明の里。古代より白山信仰の登拝路として栄え、また近世には大垣藩の燃料をまかなう、段木生産や木炭生産が行われました。明治時代には濃尾震災が発生し、壊滅的な被害を受けたものの、その後の造林事業で山は再び緑豊かに。現在は、人・自然をテーマとしたふれあい事業が活発に行われています。

根尾村、地名の由来

越美国境にそびえる能郷白山。それに連なる緑深き山々、これらの山峡から流れ出る数多くの渓谷、その水がやがて根尾川といつ清流となり、根尾村を縦断しています。この山紫水明の地は、本巣郡に所属し、美濃国の北部に位置。北は越美山脈(屏風山脈)の分水嶺を境として、日本海側の福井県大野市や和泉村に隣接しています。かつては温見峠(一〇二〇m)や蝸帽子峠(千m)などの高い峠を越える山道があり、美濃と越前を結ぶ重要な交通路でした。根尾村の名を領尾と書いた時代もありましたが、これは能郷白山を中心に一連の屏風山脈を領と見た平野地域の人々が、この一帯を領尾と呼んだことに由来します。また領尾の文字を逆に配列すれば尾根。主峰能郷白山から南へ尾根を下がることを郷集落へ、この尾根が能郷白山の最大の尾根でした。太古、ぬかるんで平地

を歩くことが困難だった原始人は、目標を的確にとらえる尾根を好んで歩いたのでしょう。根尾村の総面積の九六％は山地。広大な山林資源に恵まれ村民の多くはかつて農林業に従事、現在は建設業が中心となっています。しかし、人口の都市流出も顕著で、過疎化は深刻な問題となっています。

根尾のあけぼの

根尾東谷で産出する菊花石は約一億年前に海底火山の噴出によってできた物とされています。今でこそ山村ですが、当時は海の底にあったのです。縄文時代にはすでに人が生活しており、松田、能郷、八谷などの各地区から土器・石器が出土しています。



菊花石

大化の改新後、美濃国にも郡が設置され、能郷白山の南山麓までは西根尾として大野郡に属し、東部は東根尾として本巣郡に属し、

た。七一五年には里を郷に改め、遠市郷が根尾村に存在していたといわれます。

白山への登拝路

能郷白山は養老二年(七一九)、僧泰澄の開基による白山信仰の山、白山の前山という意味合いをもち、白山登山道として一番多く人々が利用したのが平泉寺白山神社を経由する道でした。そのルートは東海、東山道から根尾の蝸帽子峠を越え、平泉寺から白山へ、権力抗争に敗れた敗者の多くがこの道から逃れたように、弁慶が源義経の供として潜んで通ったものこのルートのようです。こうして、白山参拝路としての西乃谷廊下は栄え、美濃・越前国境の能郷白山には熊野白山権現を祀り、白山遙



能郷白山登山道



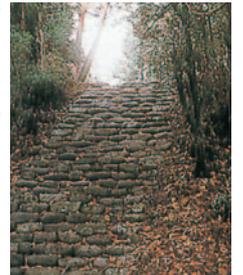
拝所としました。この神社に現存する文化財には平安中期書写の法華経や平安末期から室町時代にかけて作られた一三面の銅鏡があり、根尾谷古代から中世にかけての歴史をつかがう貴重な資料となっています。また、能郷白山神社は国の重要無形文化財に指定された能・狂言も伝えられています。

越美を結ぶ交通の要所

平泉白山神社へのルートとは別に、根尾谷から越前奥池田・府中方面への道も開けていました。中でも鎌倉幕府は西谷廊下道を政治・宗教両面から重視し、北条義時を地頭に任じたほどでした。義時は皇室を畏れ、代官派遣をためらいましたが、かえって朝廷はこの通路を重視し、三代將軍実朝に使者をたく、義時に代官派遣をつながしました。西谷廊下道は鎌倉街道とも呼ばれています。

建武の新政(一三三四～四六)が崩壊して、新田義貞が越前に兵を挙げると、美濃根尾宇津志城主であった義貞の一族堀口氏は西廊下道を平定して義貞を救援しました。また能郷白山神社の繁栄を背景にして立つ豪族が、地域の名を背負った根尾氏です。根尾氏も新田一族と結びますが、戦国時代には織田信長の配下。信長の越前攻めに活躍したといわれています。桃山時代、「鏝つくり」「鏝細工」「物員細工」

などといわる甲曹師の各派の中に、根尾派が誕生しました。中でも根尾正信は「曲筋兜」の製作を得意とした高名な甲曹師でした。



宇津志城の土塁

江戸時代を迎え、慶長六年（一六〇一）には加納藩に属し、上根尾、下根尾と細分支配され、寛永二年（一六三六）には、能郷村以外の根尾筋は大垣藩領となりました。

根尾谷の段木生産

大垣藩が山林管理と利用の上で力を入れたのが段木制度でした。段木とはこの地方独特の用語で、薪材のこと。ただ、山間地では丸太のまま川を流し、里方にて割木薪材としました。この段木生産は農地が少なくほとんど山林であり、しかも松のような有用材がほとんどない揖斐及び根尾流域において、領主が求める唯一のものであり、また地元民にしてみても、生活の糧を得る唯一の手段でした。段木の種類は、流送時に沈木しないという条件からラナンシテが中心。トチ・ナラ・ハンノキ・カシ・サウワクは段木用材として禁止されています。比重が大きくて沈下してしまうこと、食用樹種は保護すべきことなどがその理由でした。

根尾谷村々に段木年貢二千間を課したのは寛永一五年（一六三八）のこと。年貢段木は米納の代わりに課せられましたが大垣藩は根尾谷の貧困を考えてか、一段一間につき銀四匁六五厘を支給、後には木も不足し山も遠くならぬので、二匁五厘が加算され、総額で金二五〇両となりました。しかもその内一五五両は無利息で前年の冬に前渡しされ、翌春、段木完納の際、清算されました。この制度は飛騨国の元伐賃支払形式に酷似しています。

根尾筋の木地挽たち

轆轤ちくろを使って、椀・盆・杓子などの日用品を作る工人を、美濃国では木地挽と呼びます。

木地挽は木地師・木地屋とも呼ばれ、諸国山中のトチやブナの原木を求めて、濃白生活を送り、伝承の木地屋文書を持っています。この中には木地挽自身の生活を守るため、朱雀天皇の繪言のような偽文書も含まれています。この繪言は全国山々の七合目以上の広葉樹の伐採を独占するほどの威力をもっていたからです。

木地師が根尾谷に最初にいらしたのは承平五年（九三五）。木地師の入山が活発になってくるのは、江戸時代初頭からです。以後大垣藩に原木の運上金を納めていたことから、大垣藩も他国の木地挽の入山を一切禁止していました。

根尾谷では地元の木地挽と他国の木地挽が、栃山の入山を巡って紛争が発生しています。寛延三年（一七五〇）には伊勢の木地挽が入り込み、上大須・水鳥・門脇の山を買入れたことから、地元木地挽との間に訴訟が起こりました。大垣藩が他国の木地挽の入山を認めないなかつたからです。その結果、明和三年（一七六六）には根尾の大庄屋大柳半兵衛、所原兵衛が役義を取り上げられ、お目見えさしとめという大事件に発展しました。以来根尾では大庄屋がいなくなり、これに代わって名主総代が置かれるようになりました。

木地挽の存在を示すかのように、根尾に木地屋敷とか木地屋平という地名が、そしてその屋敷跡も残されています。しかし明治時代を迎えると土地の官有区分が確立されたため、次第に土着して帰農するようになりました。

根尾山の藩営製炭

大垣藩のもつ二つの林産物に木炭生産がありました。享和元年（一八〇一）、大垣藩は根尾谷の農民救済のため、もつ二つは自家用炭と鉱業用炭等確保の目的で藩営製炭を行うようになりまし。根尾谷では宇津志・高尾・水鳥で開始。その条件の中には、材木や段木生産に支障がないことという条項があるように、当初から段木生産との競合が予想されました。そこで、段木生産に支障のない場所に炭釜を



くろこ

設けたり、段木の伐採地に残された樹木を利用するなど、様々な工夫がなされていたようです。根尾谷の当初の年間炭生産量は五貫目入り俵で三四四俵。その約半分は大野郡更地村（現大野町）に販売しています。その大きな理由は、この付近に石灰岩が産出し、石灰焼出に大量の木炭を必要としたからです。石灰三四五俵、石灰釜（一分）、生産に必要な木炭は、一丁三俵、伊吹山をはさんで近江と美濃の石灰は国内でも上質と評価されていたことから全国的な需要も多く、それに連れ木炭生産も発達していったようです。

金原明善と植林政索



金原明善

明治時代を迎えると、根尾一帯は大垣県に、その後岐阜県に所属することとなりました。現在の根尾村は、明治三七年本巣郡の東根尾村、中根尾村、西根尾村の三か村が合併してできたものです。明治一四年の濃尾地震は、村内のほとんどの山を裸山に一変させるといって大災害をもたらしました。そこで明治三〇年、復興事業について湯本岐阜県知事よりの要請を受けた金原明善は、岐阜県内の水源地を实地踏査することとなりました。金原明善は静岡県出身の事業家であり篤志家。天竜川の治水工事や富士山麓植林などに貢献しています。金原が率いる調査隊には、山田省三郎、金森吉次郎らがあり、彼らは地元の治水事業に貢献した人々です。

濃尾地震直後のこと、根尾谷に入った調査隊は、山岳の崩壊、土砂の流出など、その惨状は想像を絶するものだったと伝えています。その後金原明善は大垣の金森邸に逗留し、復旧対策を練りました。その結果、何と云ってもあの山岳の状態では寸時も捨ておけないが、普通の手段ではこの救済の目的を達することはできないとして、宮内大臣土方久光を訪れて陳情、惨状の写真を天覧に供しました。一方、時の首相松方正義を大垣駅に迎え、首相宛の上申書も提出。復旧事業に関して紆余曲折はあつ

たものの、
一、杉・松の樹苗を育成して無償配布する。
二、公私林の植樹に造林補助金を交付する。
以上の二点が実施されました。

着々と進むふれあい事業

金原明善の提唱により根尾村の造林は盛んになりましたが、第二次世界大戦中の軍需と戦後の復興による乱伐でかつての美林の姿は消えて、山は丸裸となりました。こうした事態を憂慮した指導当局の熱心な活動により、山は徐々に回復していきまし。一方、根尾村の経済を支えた木炭生産は、昭和四〇年代以降に始まった燃料革命で衰退。高度経済による人口の都市流出も伴って、過疎化は顕著になっています。



奥美濃水力発電所(ダム湖)



温泉を利用したサービスセンター

現在根尾村では、人・自然をテーマにしたふれあい事業に積極的に取り組んでいます。岐阜県が進めている「花いっぱい運動」の推進や、淡墨桜オーナー制度はその一例。後者は広く会員を募集して銘木「淡墨桜」の子孫を苗木から育てようとするものです。また、高齢化対策として保健センターや高齢者生活福祉センターを建設し、村民全体に行き届いた福祉を提供するため、さまざまなプロジェクトを展開しています。

参考文献

- 『根尾村史』 昭和五五年 根尾村
- 『木曾三川流域誌』 平成四年 建設省
- 『岐阜県林業史』
- 『中寄美濃国編』 昭和六〇年 岐阜県
- 『根尾村勢要覧』 根尾村
- 『角川地名大辞典24岐阜県』 角川書店



根尾川の氾濫（平成14年7月台風6号時）



濃尾地震直後の根尾谷断層



現在の断層

一瞬にして牙をむく災害 その被害の実情

根尾村は揖斐川に合流する根尾川の水源地。ふだんは緑豊かな山々も、震災や水害で無残な姿になることも。源流の災害は、下流域にも大きな影響を及ぼしました。中でも明治二四年に発生した濃尾地震は、近代史上最大級の規模。昭和三四年に襲来した伊勢湾台風はこの地に大きな爪跡を残しました。そんな災害や水害をレポート。

過去の災害を知ること、治山治水や防災の大切さを考えていきたいと思います。

有史以来最大規模の濃尾地震

明治二四年一〇月八日午前六時三十分頃、根尾谷付近を震源として発生した濃尾地震は有史以来、当時のわが国における内陸地震として最大規模の地震でした。有感地域は仙台以南の日本全国に及び、激震地域は約一万kmに達しました。被害は建物全壊一四万二千七戸、死者七二七三人のほか、山崩れが多発し、各所で火災が発生、特に美濃地方、尾張地方の被害は惨状を呈するものでした。

この日、根尾村では一大鳴動とともに山々は崩壊して山容は一変し、一時は暗黒になったようです。根尾村の犠牲者一四五名、全家屋一三一九戸の内、八戸を残してほぼ全壊。田畑はその位置を変え、道路や橋も土に埋まってその原

濃尾地震の余震

年月	烈震	強震	弱震	微震	鳴動	計
24年11月	2	29	852	106	98	1087
24年12月	3	9	204	137	63	416
25年中	2	19	86	557	203	867

濃尾地震の復旧事業

愛知県、岐阜県ではともに、翌春の融雪水害期を控えて、堤防・護岸などの復旧が急がれました。西尾では治山・治水関係の民力による復旧は困難であるとし、木曾・長良・揖斐の大河川に閉鎖する堤防・樋管など最も緊急を要する箇所を復旧第一工事（その他の治山・治水及び道路・橋梁の復旧第二工事）について国庫の補助を申請し、総額約五五〇万円の補助

形を失い、根尾川河底も著しく高低を生じ、あるいは激流になり、あるいは溜となりました。これは、能郷村内の藤谷で、直径四kmに及び、土地が陥没したことによるもので、最もひどかった水鳥地内では、南西側が六kmも沈下したといわれ、水平に三kmも横すべりました。そのため、岐阜市に通じる国道はこの断層で断ち切られ、根尾川は堰き止められて氾濫し、いたるところに湖水ができました。中でも水鳥地内から板所地内にかけての湖水は最も大きく、この湖水のために唯一の幹線道路を遮断され、以来、大正になるまで舟で交通の便を図ったほどでした。

地震の後に発生した余震は上記の表のとおりです。



能郷小学校の倒壊（明治24年10月28日）



水鳥橋附近の大湖水（濃尾地震時）

根尾の水害の特徴

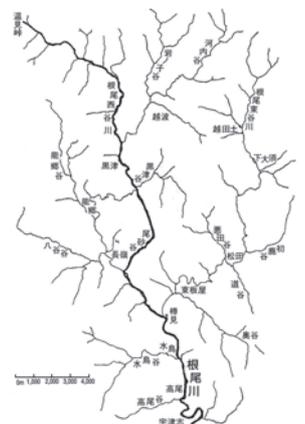
根尾村は雨や雪が多く、集中豪雨や土砂くずれ、雪崩などが度々発生しています。根尾村の自然条件が本県部の一番奥の山村であること、一年を通じて雨が多いこと、冬季の豪雪、弱い山肌、山林の伐採、狭い道などが主な要因です。記録によれば、根尾の水害の最初は天曆二年九四八、根尾川氾濫したと記されています。度重なる水害は根尾村の重要な課題。昭和には次のような水害が発生しています。

昭和三四八年八月の台風一四号

昭和三四八年八月二日朝から降り始めた雨は夕刻から強さが増し、黒津（根尾川）では三六六mmとなりました。翌朝から小康状態を保つことができましたが、台風一四号の接近により昼頃から一時間に三〇・五〇mmの降雨をもたらす。特に西濃地方は連日に渡り、日雨量三百から三百mmの降雨をみましました。この降雨の影響で、二日午後一〇時には板所（根尾川）で警戒水位を突破。根尾川は大洪水となり、各所の堤防用水路に大きな被害を受けました。能郷を

を受けました。

西濃地方における第二工事は、木曾・長良・揖斐川とこれに連続する支派川の受堤及び樋管などを対象に、明治二四年度にほとんどの堤防を復旧、護岸、樋管については、一箇所を除き、明治三五年度中に復旧を終えました。第二工事は第一工事以外の河川及び道路、橋梁、治山関係について、明治三五年六月を目標とした復旧が行われました。



根尾村の水系図

はじめ、天神堂・水鳥の低所水田はごとく冠水・流失し、黒津・八谷・越波・大須の橋が流失・被害総額は一億円を越えました。

伊勢湾台風

昭和三四年九月二六日に襲来した伊勢湾台風は、わが国の災害史上未曾有の被害を東海地方にもたらしました。

同日午前六時一五分、潮岬の西の地点に上陸した台風は、午後七時には奈良県中部、九時には鈴鹿峠付近を通り、毎時六〇kmから七五kmの速度で、一時には揖斐川上流に達しました。この時の中心気圧は九四五mb、瞬間最大風速四二・二mを示し、風速二〇m以上の暴風圏は三百ないし四百kmに達しました。

台風はさらに平均時速六五kmで北東に進み、根尾村を縦断して二七日〇時四五分には日本海へ抜けましたが、台風の進路右半圏にさらされた東海地方全域並びに伊勢湾沿岸は最悪の状態でした。

岐阜県では二五日の午後から二六日にかけて台風前面の前線活動による雨が各地に降っており、通過する前後の数時間は、時間雨量四〇〜七〇mmの激しい豪雨となり、岐阜県下の各河川はわずかの間に警戒水位を突破し、大きな災害をもたらしました。

根尾村においても数千年来の大洪水となり、



水鳥橋の大破 (伊勢湾台風時)

流失家屋一戸、浸水七〇戸をはじめ、田畑の流失も一〇町歩に及び、山は崩壊して土砂の流出は谷を埋め、特に山林の被害は多大で、樹齢何百年という神社の老木の多くは折れたり倒れたりしました。また、橋梁の流失も三箇所あり、奥地の道路は寸断されて交通不能となり、大須・越波などは陸の孤島となりました。

昭和四〇年集中豪雨

九月一五日の集中豪雨は、揖斐郡の山間部から根尾村にかけての狭い地域に総降雨量九五〇mmと、岐阜県下における記録的な雨量となりました。この豪雨により、能郷白山を中心に大きな山崩れが発生し、山津波となって土砂が流出しました。

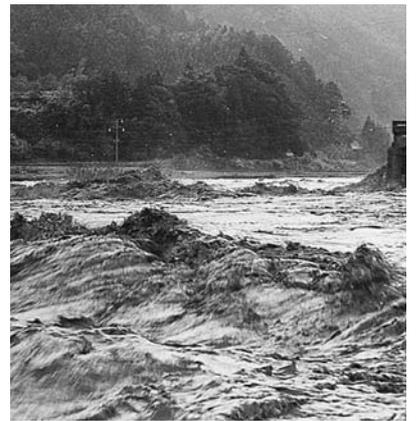
能郷谷では堰堤が決壊、沈積した土砂が一挙に流れ出し、付近の水田はごとく埋没して上原橋の橋脚をへし折り、下流の水田をも流没させました。大河原の谷でもいたるところで山津波が発生し、多量の土砂が流出し、道路や林が流失する被害をこらえています。一方、八谷地区では馬坂付近の山が半分ほど地滑りを起し、その土砂は流木とともに小倉地内まで谷いばいに流積しました。

北部一帯のこうした大洪水は一つになり、大井の大門橋や水鳥橋を押し流し、根尾川上流域二七町歩の水田を流失させるといって未曾有の被害となりました。

伊勢湾台風が続くこの集中豪雨は源流域の



八谷区白谷の崩壊 (昭和40年集中豪雨)



大井大門橋の流失 (昭和40年集中豪雨)

人々に大きなショックと不安を与え、大河原をはじめ、越波・黒津・大須などの人々が故郷を離れ、村外へ転出するきっかけの一つにさえなるといわれられています。



水鳥の渡し (昭和40年集中豪雨)

この大災害のため建設省(国土交通省)直轄の砂防事業を実施することとなり、越美山系砂防工事事務所(昭和四三年四月)設立のきっかけとなりました。

工事は昭和四三年度から災害で荒廃した能郷谷から着手して順次他の溪流へ進められました。荒廃した水源山地に対する砂防事業は、下流域の集落・公共施設に対しての直接土砂災害の防止のほか、根尾川流域では下流河川の河状安定という水系一貫とした防止を主目的として砂防ダム・土石流対策ダム・流路工などを実施しました。

平成一四年七月一〇日の台風六号

日本付近に接近した台風六号が梅雨前線を刺激し、七月九日から九州地方以北東北

地方以南のほぼ全国に記録的な大雨をもたらしました。

根尾村の被害は、床上浸水民家二戸、その他二件、床下浸水十戸のほか、濃尾地震の資料館・地震断層観察館が水没しました。

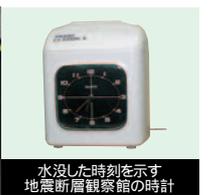
泥の海と化した地震断層観察館の時計は奇しくも一世紀以上も前に起きた濃尾地震の発生時刻、一八九一年一〇月二八日午前六時三七分と同じ時刻を指して止まってしまいました。

七月二日には根尾中学校の生徒も復旧作業に参加。七月二五日に兵庫県北淡町と株式会社ほぐたんから災害見舞金として各一〇万円ずつ寄付されました。

地震断層博物館は現在休館中ですが、春の「リアルオープン」を目指して復旧作業中。早期復旧をめざして計画を策定しています。



根尾中の生徒も復旧作業に参加



水没した時刻を示す地震断層観察館の時計



台風で陥没した道路 (平成14年7月台風6号時)

参考文献

- 『根尾村史』 昭和五五年 根尾村
- 『木曾三川治水 百年のあゆみ』 平成七年 建設省
- 『木曾三川』その流域と河川技術』 昭和六三年 建設省
- 『根尾村勢要覧』 根尾村
- 『角川地名大辞典24岐阜県』 角川書店



能郷白山

小雪の舞い降りる山国に 文化の源流をみる。

蒼い冬空に超然と姿をあらわす能郷白山。碧い水面をみせて輝く根尾の清流。田んぼにぶんわりする雪のしゅつたんが山国の冬の口を物語る。きびしくもやさしい自然のいとなみが根尾の伝統も文化も育んだのであろう。空に向かって枝を振り上げる淡墨桜は花開く日を今か今かと待ちわびていた。

雪にいだかれた能郷白山

名神高速道路岐阜羽島インターチェンジから北へ、国道一五七号に入りゆくり走りついで、冬柔らかな陽差しを浴びた根尾川がきらきらと輝いています。水面に浮かぶ水鳥たちもつかのま太陽を満喫しているようです。大垣インターチェンジから約一時間、車窓を冬の日の穏やかな風景が流れていきます。畑では、もみへに日本手ぬぐいを姉さんがぶらしたお年寄りが、腰をこんとたたきながら、空を見上げていました。その視線の先に、悠然と姿をあらわしていたのが、能郷白山です。純白の雪をいだいた能郷白山は、信仰の山、遠い昔から根尾の人々の暮らしを守ってきたので、じつと、伝承によれば、泰澄によって開かれた白山信仰の霊山。雪におあわれた冬の白い姿も、緑に包まれた夏の碧さもまた



根尾川の源流の東谷

美しく、昭和五〇年には自然環境保全地域に指定されました。

継体天皇の伝説

淡墨桜といえは、根尾村と誰もが連想できず、延々と自動車が進む道も、この時期なら、スズ、うすすみ公園への沿道に点在する食堂も冬はのれんをおろして、アツい湯焼き、山菜パンなどの看板だけが食欲を刺激します。清流に洗われた山菜や川魚は、その美味しさを、うすでも、名物は後のお楽しみ。と、いつとで、車を走ると、樹齢五百年といつを木が超然と天に向かてそびえ立っていました。一〇本の添え木に力は借りていてもなお、力強く枯れ枝を天に振り上げる姿は、雄々しいばかり、樹高一六・三三、幹囲九・九一にも及ぶ淡墨桜は、花の色が散り際に淡い墨をひいたまっつな色をしていて、この名がいつたてられたか、



冬の淡墨桜



明治時代の桜

身の代と遺すは桜の薄住よ。千代に其の名を栄盛へと止む。幼少時より根尾村に隠れ住んでいた継体天皇が都へ戻ることになった時、世話になった村人たちに記念として桜の樹を植えられる。この歌はその時に詠まれたもので、自分の代わりに残していく薄住が村とともに末永く栄えるようにとの願いが込められています。

根接ぎで往年の美しさに

継体天皇の伝承を残すこの淡墨桜が、その生命に衰えを見せ始めたのは、大正初期のこと、折からの大雪で枝が折れ、木幹に亀裂が生じた頃からです。村の人々も多くの名木たちがこの名木の枯死を惜しむ、劣を惜しむことなく保護に努めてきました。淡墨桜に行われた手術は四回で第一回は昭和二四年三月一日、樹木医の前田利行をはじめ数名が来村し、ほぼ一ヶ月をかけて三三八本の根接ぎが行われました。



根接作業

その手術で、木幹周囲を掘り起すと巨根はほとんど枯死状態で、腐朽箇所には無数のシロアリが生息、まずそれを駆除するところから始まりました。その一方、近くの山から山桜の若根を採取し、わずかに活力ある残根に特殊な方法でできる限り多く根接ぎを施したのです。早春といえどもまだまだ底冷えするこの季節、折降る雪と闘いながら根接ぎは無事終わり、淡墨桜は往年の美しさを取り戻したのでした。暮れなすむ空に浮かび上がる淡墨桜は、神々しいばかり、丹精こめた愛情は、爛漫の春を咲かせたのでした。

宇野千代と淡墨桜

昭和三四年、中部地方を直撃した伊勢湾台

風はまたしてもの老木に大きな被害を与えました。太い枝が折れ、葉や小枝はほとんどもぎ取られ、無残な姿になってしまいました。村ではさう保護に励みませんが、樹勢はなかなか回復しません。そんな頃、昭和四二年に作家の宇野千代が根尾を訪れた。生気を失い、枝をまかれた老桜の姿に心を痛めた宇野千代は、グロリア雑誌、太陽にその状況を発表。当時の岐阜県知事にも何とかこの淡墨桜が枯死するのを防いでほしいと切々と訴えたのでした。こうして宇野千代の願いは、美り、またもまたまな作業が行われたのでした。

中世のおもかげを残す能・狂言

淡墨桜が咲き競うころ、能郷白山神社では能・狂言が奉納されます。国の重要無形文化財に指定されている能・狂言は、四方を千m以上の山々に囲まれた能郷集落に伝えられる伝統芸能です。明治以前まで、ほのひ握りの農地と山仕事に頼っていた集落の暮らしは、まさに自然との闘いで、冬は豪雪と夏は日照りとして秋は洪水と闘いながらも、美りを与えてくれる自然とでも生きてきたのです。だから、人々は集落の中央に鎮座する能郷白山神社への信仰を深めていったのでした。わずかに中世の面影を伝える能・狂言は、



能郷の能・狂言



宇野千代筆の石碑

根・尾・村・の・歳・時・記

樽見の十一日祭り

岐阜県指定重要無形民俗文化財・旧暦1月11日



樽見白山神社で天下の奇祭として、旧暦の1月11日に行なわれる田楽祭り。根尾の伝統的な祭りの一つに挙げられるこの「十一日祭り」とは、厄男らによる根尾川での裸、奉射、大根で作られたサイコロ占いなどが催されます。

村が豊年豊作でよい年でありますようにと村をあげて祈る祭りです。昭和54年、県の重要無形民俗文化財の指定を受けました。

根尾村 EVENT INFORMATION

春	能郷の能・狂言	4月13日
	根尾まつり	4月第2日曜日
	淡墨桜見ごろ	4月上旬
夏	根尾川釣り	6月上旬より
	キャンプ	7月上旬～8月下旬
	能郷白山登山	通年
秋	門脇の雨乞踊り	9月第3日曜日
	うずみサマーフェスティバル	8月中旬
	温見峠の紅葉	10月中旬～11月上旬
冬	倉見溪谷の紅葉	10月中旬～11月上旬
	ダム湖の紅葉	10月中旬～11月上旬
	樽見の十一日祭	旧暦1月11日
	アマゴつり	2月1日～9月9日



交通のご案内

名古屋方面からお車をご利用の方
 名古屋 名神高速道路 岐阜羽島IC 国道21号・国道157号 (約1時間15分)

名古屋方面から公共交通機関をご利用の方
 名古屋駅 JR東海道線 大垣 樽見鉄道 (約1時間)

お問い合わせ
 根尾村役場
 岐阜県本巣郡根尾村板所625番地の1 TEL 058138-2511(代)
 http://www.neomura.jp e-mail:ir50Qneomura.jp

気ままにJOURNEY

能郷集落の猿楽衆の家一六戸にあって白山神社に奉納され、村内安全・家内安全・五穀豊穡を祈った神事芸能です。

猿楽とは能・狂言のルーツといわれるもの。この能・狂言がいこうから始まり、どのように発展してきたのかは、衣装などを収める宝物蔵が焼失してしまったので定かではありません。越前猿楽の流れを汲むのが、大和猿楽の影響を受けていたと、諸説がありますが、それも時代の謎。かつて猿楽が村を挙げての神事芸能だった昔、きくと能郷集落だけに限らず、多くの村々で能・狂言が行われていたのでは、と推測されます。それがなげにこぼれに残ったのは、ここからは推測になりませんが、閉ざされた奥深い山だけに、他の集落との交流も少なく、それがかえって村人の結束を固め、能の源流ともいえる様式を守ることができたのではないのでしょうか。今のようには、テレビもラジオもない時代、人々にしては大切な娯楽の一つだったとしても、要因の一つです。



能郷白山神社

そんな能・狂言も江戸時代後期には、徳山城主徳山五兵衛の庇護を受け隆盛したようですが、戦時中から戦後の動乱期にかけては、ほとんど顧みられなくなり、このままでは滅びてしまう危機にさらされてきたのです。この頃、かみ舞の型も謡の調子も次第に忘れられ、今では上演できなくなっている曲目も相当数あるといわれています。

各地の伝統芸能が、後継者不足などで風前の灯火、過疎化や高齢化が進む能郷集落も同じ課題に直面しています。かつての猿楽衆一六戸の世襲も今では不可能。しかし、それは能郷集落の団結力の強さ、集落約四〇戸の若者たちはすべて能・狂言に参加、奉納される四月の一ヶ月前から、特訓が始まります。

根尾村役場に勤める松葉勇さん、その一人、小学六年生から狂言に参加しています。「僕たちの子どもの頃は、保存会の会長さんが言う言葉全部ノートに書き写していました。資料なんかありませんから、意味はまったくわからないし、どこで区別するのかもわからない。最初はただ書いて覚えて、そこから始めました。それが二、三年のうちに冊子ができました。」

伝統芸能にはつづきの容姿です。そのやさしげな表情とは裏腹に、根尾村役場でもトップレベルのスペシャリスト。百口は三〇歳の今なお、「一秒をキープ。スキップは指導員がマスの腕前で、野球チームは四番ピッチャーとして大活躍。そんな松葉さん、仕事と狂言の両立は頭の痛、問題です。」

「奉納の一ヶ月前から毎日、七時から二〇時まで練習です。しかしこの時期は役場も一番多忙なとき。練習が終わってから仕事に戻る事もしばしばです。それにもまして大きいのが、プレッシャー。私のレパートリーは一四、五曲はあるのですが、一年に一回しか上演しませんから、いも初めの緊張感、祭礼には県外からも多くのお客様がいらしますから、間違えることができません。ひびひびのしどろしどろです。」

そんな松葉さんの大好きな曲目が、たわけむこ。「ほんとにうまなむこさんが、嫁をもらいたいでも、それがうまくいえないので、お父さんに教えてもらった通り。」と、とまどいながら語りだす。



狂言の若手後継者 松葉勇さん

繰り返すので、結局は嫁をもらえなかった、という話です。このときにも、お父さんも大爆笑。やめてよかったですと実感します。」

能郷集落の狂言方は合計五人。能方は約一〇人。彼らだけが国の重要無形文化財を支えているのだから、そのプレッシャーは押し知るべし。またまだ演じているのゆとりや醍醐味を感じる胸中には、たいていとは、松葉さんの本音です。「でも昨年、アメリカのワシントンで舞白にたどきには、感動しましたね。初めての海外公演でしたから。今は狂言専門ですが、いずれは能にもチャレンジしてみたいですね。」

時には長男に生まれたことを誇りに思っていた松葉さんですが、自然豊かな根尾村は今では彼の検舞台、役場のスナックとして、伝統芸能の後継者として、この地にしっかりと根を張っていきたく、抱負を語ってくれました。

そんな松葉さんのお勧めスポットが、つずみ温泉とホテルのレストランです。つたむ湯や五右衛門風呂で疲れを落としたり、レストランで旬の味覚、つずみ川、川の幸の代表、アジメドジョウの柳川鍋、越前風のバナ、美味しさは格別です。心づくしの足元は、根尾村の人情を映しだしているように感じました。

国内最大規模の川幅を誇る 起渡船場と美濃路



美濃路は重要な脇往還

美濃路は東海道宮の宿(熱田)と中山道垂井宿を結ぶ約五八kmの街道です。途中、濃尾平野を流れる木曾・境・長良・揖斐の大河川を越え、名古屋・清須・稲葉・起・墨俣・大垣の七つの宿がありました。

この街道の歴史は、慶長五年(一六〇〇)天下を分けた関ヶ原の合戦直後に、徳川家康が凱旋して整備された街道でした。こうしためでたい街道という意味合いから、御吉例街道とも呼ばれるようになりました。

近江から美濃へ抜け尾張へ至る濃尾平野を縦断するこの街道の軍事的な重要性を戦いによって体験した家康は、全国交通路の一環宿並として組み込むことを企図したのでしょう。尾張藩が編纂した「尾張志」は、関ヶ原戦争の

川は鉄道の時代になるまで、人や荷物の往来する動脈でした。中山道の脇往還として

多くの人々が通行した美濃路の中でも最大規模の起宿は、木曾川の水上交通と陸路を結ぶ渡船場を擁していました。

三つの渡し口をもつ起の渡しは、日本国内でも最大規模の川幅を誇る渡船場。将軍や参勤交代の大名、朝鮮通信使をはじめ地元の人々の足として活躍しました。

勝利者帰陣のために、人馬役の微発を課せられた稲葉・秋原・起の三か村が、美濃路の宿駅として起立したと記しています。こうして美濃路は、東海道・中山道・日光街道・奥州道中・甲州道中の五街道に準じた主要な街道として幕府の道中奉行の支配下に加えられ、脇往還(脇街道)として、多くの旅行者に利用されました。

美濃路が大いに利用された大きな理由に迂回路としての性格がありました。江戸と京都の往来は、中山道の木曾谷、東海道の海路「七里の渡し」と、鈴鹿峠など危険な箇所があり、これらを避けるにいたって安定性の高い街道であったことが挙げられます。

この街道を利用したのは、一般旅行者のほか、朝鮮通信使・琉球王使の国際的なものから、将軍の上洛や大名の参勤交代、幕府へ献上



現在の起の街道筋

の船艀やお茶壺道中、象など当時の珍獣も通行しました。この内、将軍と朝鮮通信使の通行には、大河川に船橋を架け、数多く往来する大名中、紀州藩主の通行もまた、境川に船橋を架けました。

国内最大規模の川幅の起の渡船場

慶長五年に起立した起宿は尾張藩領内木曾川東岸、現在の愛知県尾西市に位置し、起川河岸に沿って南北に長く伸びた宿場町でした。北から定渡船場、宮河戸、船橋河戸の三つの渡し口が設けられていました。起から次の宿場町、墨俣に達する間には木曾川が流れており、八町三〇間、俗に四一〇間という国内最大の川幅の渡船場でした。定渡船場は金比羅社から対岸の新井村羽島市正木町新井へ渡



宮河戸跡と大明神社

る日常に使われる渡船場で、こんびらさんの渡しとして親しまれ、昭和三年までポンポン船が運行していました。宮河戸は大明神社前から同じく新井村燈明河戸へ渡ったことから宮河戸と呼ばれ、起の商家が商う物資を運ぶ船が発着する湊でした。船橋河戸は朝鮮通信使、将軍あるいはそれに相当する身分の者の通行に際して船橋を架けるときに使われたもので、対岸は正木村三柳羽島市正木町三ツ柳でした。

船橋はおよそ三〇〇艘の船をついで橋のようにしたもので、尾張藩の御船手奉行の支配で架けられ、河原には船番所が設けられました。また、常時は船橋用具を収納する蔵三軒が近くの堤防の上に建てられました。渡し口には、定渡船一艘、置船・御召渡船各一艘、合計四艘が尾張藩船役所より預けられ、他にも鵜飼船一七艘、馬船一四艘があり、渡し場は対岸とともに起宿船庄屋が管理し、船頭二〇名がいました。



こんびらさんの渡しの常夜灯

船橋跡

起川・現在の木曾川本流。近代以前木曾川の長大な流路は一定の名称をもち、流れる地方の名前を冠して呼ばれることが多かったようです。

周辺村民の足として活躍

渡船場を利用したのは旅行者ばかりではなく、周辺村民が最も多く利用していました。彼らは利用する度に運賃を支払っていたのではなく、毎年、一定の米・麦・銭を一村ごとにとまとして支払っており、この支払を「とい」と呼んでいました。元禄三年（一六九〇）に起川がといをとっていた村数は合計五〇か村。一年の「とい」料の合計は米七石七斗一升・麦五石二斗五升・銭三貫七千文にもほり、いかに起渡船場を利用する人々が多かったかがわかります。

渡船場の水没対応策

美濃路を横断する木曾川・境川・長良川はしばしば氾濫し、長期に渡って水没することもありました。しかし、参勤交代の大名衆をはじめとする旅行者のために、また彼らを相手に商売を営む街道沿いの村人のためにも、街道の早期開通が必要でした。寛政一〇年（一七九八）の洪水は、須賀村から西小熊村までの美濃路を数か月に渡って水没させました。このとき起川（現木曾川）・境川・墨俣川（現長良川）の渡船場の船庄屋らがとった方法は次の通りです。

- 一 往還のため木曾川から馬渡船一艘と鶴飼船一艘、長良川から檣船三艘、境川から歩行船四艘を出し、西小熊村と須賀村の波止場に配備する。
- 二 賃金は旅人一人に付き四八文とし、その内二文を船場の諸費用に充てる。
- 三 須賀村には東会所、西小熊村に西会所を置く。会所で川札を発行し、はね銭を徴収する。

四 大名衆の渡し方は御馳走大名、尾張藩接待の大名については藩により寄船が行われ、その他の大名については借り船が

なされる。

臨時にとられたこの処置は、しかし三大河川の船庄屋・船役人に通常以上の広範な持ち場を与えたため、彼らには多くの利益を得ることができたようです。

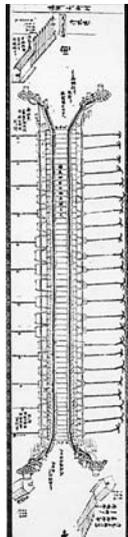
船橋架橋とその方法

古来、船橋といえは佐野の渡し、群馬県高崎市が有名で、万葉集にも歌われるほど、能楽にも「船橋」という題名がありますが、その古名は「佐野船橋」でした。木曾川の船橋は全国でも最大規模でした。江戸時代に船橋が架設されたのは、慶長一六年（一六一一）を皮切りに、合計一八回でした。

架設は船奉行のもと起宿の船役人があたり、美濃・尾張の川沿いの村々から三百艘を越す船を集めました。その架設方法は、船の前後に錨を付けて約三尺間隔に配列、船の上には桁を渡して棕櫚縄と白口藤縄（つる性の灌木）で緊縛し、その上に長さ九尺、幅一尺の厚板三〇六枚を並列して固定。さらに太い鉄鎖と白口藤縄によって両岸を結ぶ張縄を作り、橋板をこれに固く結びつけました。架設・架橋にかかる費用の一切は尾張藩が負担。近郷から延べにして五千人から一万人近い人足を動員し、人足にはそれぞれ賃銭が支払われました。これらの人足は木曾川上流から集めた白口藤を縄にする作業船の回送雨の場合には船の水替え、渡し場の築堤、船つなぎ作業、夜番などを担当。これらは請負



起川船橋の略絵図 船橋の模型

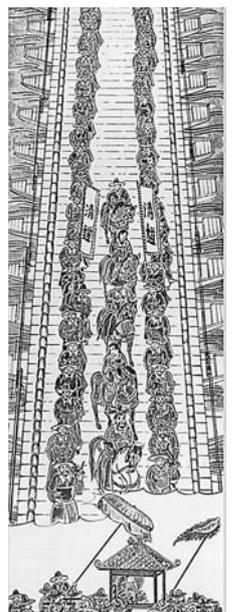


は、使節の経路となっていたので、「朝鮮人街道」と呼ばれていました。そして中山道の垂井から美濃路に入り、名古屋を経て岡崎で將軍の使者の迎えを受け、一路江戸へ向かいました。これは帰路も同様で、一行の総人数は大体五百人弱でした。

鎖国政策下の江戸時代、朝鮮通信使は日本の正式の外交関係を保つた唯一の国からの使節でした。一行の江戸へ至る経路は、京城を出発して陸路釜山に下り、海路対馬・壹岐を経て瀬戸内海に入り、大坂へ到着。大坂からは川船に乗って淀に上陸し、京都へ。その後東海道を經由して中山道へ。守山（野洲）からは琵琶湖の眺めも美しい浜街道に入り、鳥居本で再び中山道の本道へ。中山道に並行したこの街道は、使節の経路となっていたので、「朝鮮人街道」と呼ばれていました。そして中山道の垂井から美濃路に入り、名古屋を経て岡崎で將軍の使者の迎えを受け、一路江戸へ向かいました。これは帰路も同様で、一行の総人数は大体五百人弱でした。

朝鮮通信使が見た船橋

朝鮮通信使の場合は異国風俗のもの珍しさもあって、遠方からも見物客が多く押しかけていたようです。享保四年（一七一九）の使節の記録「海遊録」によれば、見物の男女は両岸を埋め尽くし、中には幕を張り弁当持参の者もいたといふ。また寛永一〇年（一六四三）の記録によれば、起川の浮橋は堅固で平坦、その幅の広さは望見して牛馬を区別できないほど。大きな鉄鋼は左右の両端の橋の頭部を縛っており、役人が声を上げ、通行人を規制していたので、誰も橋を歩いて行くことができなかった。



船橋を渡る朝鮮通信使一行

起川の船橋は三百艘弱の船を使用。境川のそれは三〇艘弱だったといふから、その規模の大きさをうかがい知ることができま

享保の象、起川を渡る

象の日本への渡来は応永一五年（一四〇八）、將軍足利義持への献上が最初といわれています。その後、明国や交趾國（ベトナム）より渡来。鎖国のため一時途絶えたものの、享保一三年（一七一八）、清国商人が長崎へ象をもたらしました。長崎を發つた象は大坂から京都へ。ここからは中山道筋へ出て、美濃路経由で東海道を東行しました。

象の通る沿道の諸準備も大変なもので、象は船が嫌いなので浅瀬を探して渡河させよと、か浅瀬のない川でも象は船渡しを嫌うから、船橋を用意せよと、事前に各宿場へ注意事項を傳達しています。

美濃路へ回つたのは、恐らく七里の渡しの海路を避けたため。起宿においては象船と船乗場を構築。象船の構造は、馬が三疋乗る馬船を二艘つなぎ合わせ、厚さ二寸五分の板を打ち付けてその内に土をひき、四方は象が水を見ても驚かないように延で囲んだといふ。こうした象の通行は後世まで語り継がれる珍事。遠方より多くの見物人が詰めかけたようです。

- 取材協力 尾西市歴史民俗資料館
- 参考文献 『尾西市史』
- 『通史編上巻平成一三年尾西市』
- 『美濃路と竹鼻街道をゆく』
- 『昭和六三年大垣市文化財保護協会』
- 『美濃路をゆく』
- 『平成元年大垣市文化財保護協会』
- 『尾張藩水上交通史の研究』
- 『平成一二年林順子著清文堂』
- 『美濃路熱田宿から垂井宿まで』
- 『昭和六〇年日下英之著愛知県郷土資料刊行会』



現在の木曾川東岸

起渡船場の船と人

林 順子氏

利用者と安全確保

渡船場を利用する人々を分けるとすると地元と遠方からの旅人とか、あるいは身分によって、支配層である武士と被支配層である農民、商人、職人ら一般庶民というように分類することができる。

朝晩の渡船場は、日々の生計のために川向この田畑の耕作や、町場での日稼ぎに出る地元庶民でにぎわったであろう。市や祭りなどがあればさらに、渡船場はしたがえし、さながら車掌の制止をふりきって満員の電車へ駆け込むような風景も見られた。その結果、転覆沈没事故が発生することもあった。木曾川での例は確認できないが、下野国足利郡足利村で、寛保二年（一七四二）七月の市日に、渡瀬川の渡船が沈没し三〇名以上が犠牲になっている。尾張藩領内では宝暦七年（一七五七）、濃州厚見郡池之上村の長良川渡船が転覆し、乗客乗員一一名が水死した。この事件をきっかけに、尾張藩は領内の渡船という渡船を吟味し、藩が認可しない場所での渡船を禁じ、認可した場所には残らず安全運行を命ずる高札を立てた。

大きな街道では旅人の姿も多い。特に五街道の脇往還であった美濃路は、朝鮮通信使を筆頭に、幕府の重要関係者にも利用された。見方を変えれば、美濃路沿線の藩は、これら

高位通行者に、所領の様子をさらさねばならないのである。徳川御三家筆頭の尾張藩とかなれば、その格式にかけても、交通の円滑化には気を遣ったことであろう。

起は、その美濃路における木曾川の渡船場で、当然、木曾川の他の渡船場とは異なる様相を示していた。

例えば、船の種類や維持方法である。起の船の大部分は、尾張藩から何らかの支給、あるいは拝借を受けていた。つきに、起の船の種類と船主たちを紹介しよう。

定渡船

「船主のいない「公共渡船」」

日常的に庶民にも使用される定渡船は、予備一艘を含めて三艘あり、船頭給および船本体から竿竹といった備品に至るまで、藩から支給されていた。私有船ではないので、船主はいない。現代風に言えば、「公共」の交通機関であった。

面白いことに、その支給に関する事項を担当する藩の役所は、船を監督する船手役所ではなく、街道の宿駅や伝馬と同じく地方代官所起の場合は、鶴多須代官所であった。つまり定渡船は、あたかも街道の一部、陸地の延長線であるかのような扱いを受けていたのである。



林 順子氏

1999年、南山大学経済学部経済学研究所博士後期課程修了、博士（経済学）。専門は日本経済史、特に近世河川交通史。現在、岐阜大学、愛知女子短期大学、中部大学非常勤講師。『新修名古屋市史』第三巻、『長久手町史』通史編など担当。



起宿船本陣

馬船

「参勤交代制と共に在った船」

定渡船とは別に、私有の渡船もあった。それは、馬の乗降がしやすいよう工夫された、馬船と呼ばれる船であった。

一般庶民の通行しかなないのであれば、渡船場にこのような船を置く必要もなく、現に馬



起宿脇本陣の庭園

船を備えている渡船場は数少ない。しかし、美濃路の渡船場である起

うになつた。起で初めて馬船を持ち始めたのも、この浅右衛門のようである。しかし右衛門七も、高位大名の通行時には相変わらず川端で大名の接待にあつた。また、起にいる数名の船肝煎の内、小川文右衛門家は、渡船場近くに居宅を持ち、大名側の渡船交渉の役人である川割役人の宿を勤め、上下水運の管理にも関わっていた。

かつた。また、大量の人員や物資をなるべく短時間で渡すために、波止場を延長するなどの特別措置をとることもあり、そのような場合には、馬船は波止場代わりにも使用された。つまり、馬船は大名の渡河には欠かせない船であり、寛保元年（一七四一）以降、尾張藩はその作替えや修繕費用を無利息で、船主に貸与した。それ以前にも尾張藩は、紀州徳川家の通行のときに一度ほど、馬船に手当金を給付していたが、それを貸与に切り替えたのは財政支出節減のためであらう。ともかく、金拝借を受けたおかげで船数は漸増し、明和五年（一七六八）以降は、常時一四艘の馬船が大名の渡河のために用意されていた。

ところで、この馬船の船主たちは、どのような人物であつたか。それは、船庄屋、問屋、そして一人の船肝煎で、起渡船場の運営になんらかの形で関わり、かつ川端で大名の家臣と接触する機会が多い者たちであつた。

元々、起における渡船運営の統括は、本陣を兼帯する問屋加藤右衛門七家が行っていた。しかし、通行量の増加とともに、川端での仕事が増加し、脇本陣が本陣に代わつて川端での仕事を補佐するようになつた。さらに享保五年（一七二〇）、それまでの脇本陣家の経営が立ちゆかなくなつたとき、起村高持百姓たちの協議の末、頭百姓の林浅右衛門家が、脇本陣を引き受け、同時に成立した船庄屋という役職も兼帯し、起の船方支配を取り仕切るよ

「の三人の船主は、馬船を参勤大名らに貸し出すことで運賃収入を得ることができた。いとき船庄屋が一人役となつたことも災いして、馬船の所有や利得をめぐる争いも何度か起きていた。しかし、いくら利得があると言っても、幕府の御用荷物や尾張藩家中の通行の際には、馬船の船主たちは、無償で船を提供しなくてはならなかつた。

もちろん、馬船が大名以外に貸し出されることも、無いわけではない。対岸加納新田への出作に使われることもあつたが、それは無料であつた。砂土や木、枝葉を積んだときには運賃を取つたが、その半分は馬船を實際に預かっている人の収入に、半分は出水の見廻りにかかる費用に死てられ、船主の手には入らなかつた。

つまり、参勤大名に貸し出すことによるのみ発生したのであつた。したがつて、参勤交代制が存続している間、すなわち、多くの大名が起を通り、また尾張藩が船の維持を補助している間は、馬船は起に在り続けることができた。しかし、参勤交代制のない明治期に入ると、たんに存在意義が失われ、維持もできなくなるのである。明治六年（一八七三）、一艘残らず姿を消した馬船は、江戸時代における起渡船場の役割の象徴でもあつた。

渡船以外の私有船

— それでも武士のために —

馬船よりも前に、私有船がなかつたわけではない。鵜飼船と呼ばれる、木曾川の上下水運ではごく一般的に使われていた船が、起

馬船が現れる半世紀以上も前の明暦四年（一六五八）に、すでに一艘もあつた。馬船が置かれる以前は、これらの船が大名の渡河を助けたのであつた。しかし、その後数が減り、元禄一六年（一七〇三）には六艘に落ち込んでいた。大名の渡河にも差し支えがでてきたのか、この年、尾張藩から船の修造新造のための材木の貸与が始まつた。その効果もあつたのか、文化期一八〇四—一八一七には、船数は大小合わせて一七艘に定着した。

材木拝借を受けた、江戸時代後期の鵜飼船の船主たちのなかには、起の庄屋層や商人たちの名が見られる。彼らは、馬船と同様、御用荷物や尾張藩家中にはこれらの船を無償で提供しなくてはならなかつたが、やはり参勤大名への貸出料を得ることが出来たし、また、渡船以外に利用できる名づつた馬船とは違つて、これを名古屋までの商品輸送にも利用している。

この一七艘以外に、船の維持について藩からも



起渡船場跡

援助を受けたい鵜飼船もあつた。藩の援助がなく、維持すべき船数が決まつていないために、時に一艘、時に十数艘ほどと数の変動が激しい。馬船や材木拝借鵜飼船のように、御用荷物や尾張藩家中への無償提供を強制されるものではなかつたが、馬船や拝借鵜飼船でも船数が足りないような大量の御用通行の時は、やはり徴集された。

支配されつつ、したたかに

木曾川の船は基本的に全て、幕藩の御用を最優先しなくてはならなかつたが、特に御用に徴集される機会が多い起の全ての船に対して、尾張藩は、木曾川の荷船に課せられる船役銀を免除している。私有の馬船も、拝借を受ける鵜飼船も拝借を受けたい鵜飼船も、全てである。この点では、起の船持の商人たちは、他村の船持の商人よりも有利と言えよう。

起の船は、武士階級にしてみれば、まさに自分たちのためにある船である。船庄屋の残した、川端拝領留¹⁾には、起渡船場を利用した多数の大名の家臣たちとの交渉の様子が記録されているが、家臣の何人かは、交渉しにくい高圧的な人物として描かれていた。起渡船場の人々は、彼らの渡河にこそ苦勞したことであらう。一方、武士階級がいつも船を使つたためには、尾張藩は、船を維持させるために援助する必要がある。起の人々、特に材木拝借鵜飼船の船主たちは、武士階級に支配されつつも、そのような体制だからこそ享受できる武士階級からの援助を、したたかに、自己の商売や輸送といった本業に利用していたと言えはしないか。

参考文献

『尾西市史』資料編三

（尾西市役所、一九八八年）

『尾西市史』資料編四

（尾西市役所、一九八九年）

林順子『尾張藩水上交通史の研究』

（清文堂、二〇〇〇年）

民話の小箱

しゅづと韋駄天走りの大男

本巣郡根尾村



岩の間から「こんと湧き出る清水、
あまりの美しさに手をひたせば
思わず声をあげるほどの冷たさです。
根尾村の門脇地区に湧き出ているこの清水は、
むかしから「しゅづ」と呼ばれ、

毎日夕方になると、どの家からも明朝仏さまに供えるための
特別なし飯「せんさま」の米をとぐために「こへ」出かけていました。
と「しゅづ」があるときのこと、しゅづがぱたり止まってしまうのです。

驚いて真っ赤になって怒ったのは、村一番の力持ちで大男のこの家の主人。
「この水は京の清水寺からいたいた尊い水やで。
よ「れ」ものを洗って「はならん」とあれほどやかましく言っておいたのに、」

地が揺れるほどのどなり声にすくみあがったのはこの家で働く下女です。
「せしわけいませせん、うっかりして洗濯のための
水にしゅづを使っちゃいました。どっかお許しください」
と泣きながらあやまりました。

主人はぶりぶり言いながら、
「明朝暗いうちに出かけるから準備をしておけ」と命じました。
翌朝、まだ暗いうちに旅装束をととのえた主人は、
さっそく清水寺をめざして出発。

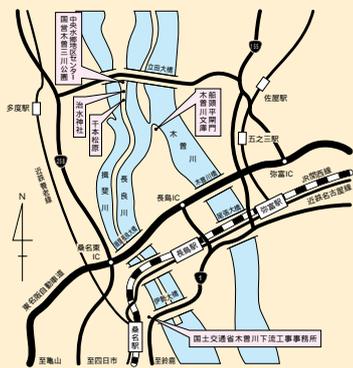
一目散に走り出しました。その速いこと、速いこと、
胸にあてた笠が京まで落ちなかつたほどでした。
清水寺へ到着した主人は、早速お参りして祈禱をすませました。
帰路にいた主人は持参のおむすびをほおばりながらひた走り、
夜遅く家にとどろきました。

それから七田目の朝、しゅづは再びもとの「こへ」で湧き出た「しゅづ」になり、
村中の人々はたいそう喜び、主人に感謝しました。
昔の人は、水には神様が宿っていると信じ、水を大切に扱ってきました。

物を大切にすることは今も大切です。



木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分
《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始
《入館料》無料
《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分
《お問い合わせ》
船頭平閘門管理所・
木曾川文庫
〒496-0947 愛知県
海部郡立田村福原
TEL(0567)24-6233



編集後記

今号の編集にあたって、岐阜県本巣郡根尾村の皆様、
尾西市歴史民俗資料館の皆様及び林順子様にご協力い
ただきありがとうございました。
今冬も木曾・長良背割堤16K付近の木曾川にコハクチ
ヨウがやってきました。数は昨年より少ないようです。
今年も、編集一同頑張ってますので、宜しくご
愛読ください。
次回は、岐阜県金山町を特集します。

木曾川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

表紙写真
上:金原明善翁顕彰碑
中左:能面しかみ 中中:能羅生門 中右:淡墨桜
下:能郷白山と根尾川